

ポラリスを仰ぐ北の大地から



— 歌舞伎三昧 —

函館市医師会 会長 本間 哲

今年も忠臣蔵シリーズだった。3段目、4段目は仮名手本、山科閑居、大石東下りは実録での公演となった。私は3幕目『碁盤太平記山科閑居、大石妻子別れの場』の大石内蔵助役。10年前に一度演じ、台詞が飛んで舞台上で頭が真っ白になった苦い思い出がある。どうしてもリベンジしたい気持ちだった。吉良上野介を討つ気配を悟られまいと京都山科の自宅で放埒三昧に暮らして問者（吉良のスパイ）の目を欺き、母親からは勘当、女房とは離縁したのち、息子主税と仇討に出かけるという物語である。

前半は酔ったふりをしてさんざん二人に悪態をつき見放されるところ、後半は二重スパイの良助が主税を狙ったお梅という問者と差し違え、瀕死の状態で碁盤に石を並べて吉良の寝所を教える場面と、内蔵助の本心を主税、母親、女房に明かす場面が見どころである。前半の母親と女房にそれぞれ悪態をつくところは相手によって言い方を少し変えるあたりが難しい。母親には少々申し訳なさを醸し出さねばならず、女房には凄みを利かせねばならない。

後半は内蔵助の敵討ち後の死の覚悟と主君浅野内匠頭に忠誠を誓った武士の堂々とした台詞回しをしなければならぬ。最近は何の舞台に立っても主人公の心の動きに入り込もうとする自分に少しばかり怖さを感じる。これが『はまっている』ことなのだろう。そして下座の音楽と所作三味線の抑揚と義太夫の語りを借りて舞台は進行して行くのだ。

『初春巴港賑（ハツハルトモエノニギワイ）』という函館の市民歌舞伎が毎年2月、市民会館大ホールで開かれる。今年第37回公演で、歴史のある古い街の文化水準の高さがうかがえる。「本間先生、今年は医師会長になって忙しいから、口上だけにしとくかい?」「いやいや、何でもいから一つ役をください。会長職そんなに大変でないから!!!?」



「ピロリ菌検診」の奮闘記

渡島医師会 会長 小笠原 実

年間5万人の死亡者を数える胃がんは感染症（ピロリ菌感染）であるのがん対策基本法に明記されている。ピロリ菌感染胃炎（慢性萎縮性胃炎）はピロリ菌を治療（除菌）することで、がんの発生が3分の1抑制されると言われているが、ピロリ菌感染の若年者は30歳頃までに除菌すればほぼ99%胃がんの発生が抑制されることも明らかになっている。

したがって、中学生のうちにピロリ菌感染の存在が分かることで、その後の生活習慣（高血糖、塩分制限など）に気をつけることになり、さらに除菌できれば自らの胃がん予防ばかりではなく、次世代の母子感染阻止にもつながるものと考え、われわれの医師会では昨年「中学生のピロリ菌検診」を事業として始めることにした。

管内（1市9町）には18の中学校があり、開始するにあたり現場の中学校の養護教諭に検診への理解をしてもらおうと働きかけた。当初は良い試みだと賛意が聞かれたが、その後何だか雲行きがあやしくなってしまう困ってしまった。それでは教育委員会に賛同していただこうと教育長に文書を送らせてもらった。だが、なかなか返答がこない。再度文書を送るも同じであった。

それでも面会して下さった両副会長（宮村先生、光銭先生）の地元の教育長は快く賛同して下さり事業初年度から検診をすることができた（5町）が、春の学校健診と同時にできたところもあれば健診時期が過ぎてしまい、秋や冬になってからやっと実施できた町もあった。

2年目の今年は、各町に実行推進委員の先生方を指名し、教育長に電話や面会をしていただき理解を得た。私が直接面会を申し込み直談判した町もあったが、この原稿を書いている時点で、残るはあと1町となった。4月の学校健診に18校すべてで検診が実施できれば「渡島地域の胃がん撲滅」の夢の第一歩を踏み出すことになる。